

事例①（入所ケース：20代男性／知的障害重度）

1. 相談主訴

- ・自分の思いどおりにならないと他害や器物破損等の危険行為に及ぶため、目が離せない。
- ・服薬を拒否する。
- ・報酬に向けて2～3日程度しか頑張れない。
- ・職員が声を掛けないと行動ができないため、本人が少しずつ職員に頼らずに一人で過ごせるようになってほしい。

2. 行動観察や施設職員からの情報を基に能力及び特性について評価

* 能力 *

- ・能力に比べて語彙が多い。語彙の多さと理解力にギャップがあるため、支援者の声掛けを理解しているように思われやすい。
- ・精神年齢は5歳程度のレベルで、言葉よりも目で見て物事を理解する段階。
- ・何分後、何時間後、何日後、何ヶ月後などの概念は分かっていない。

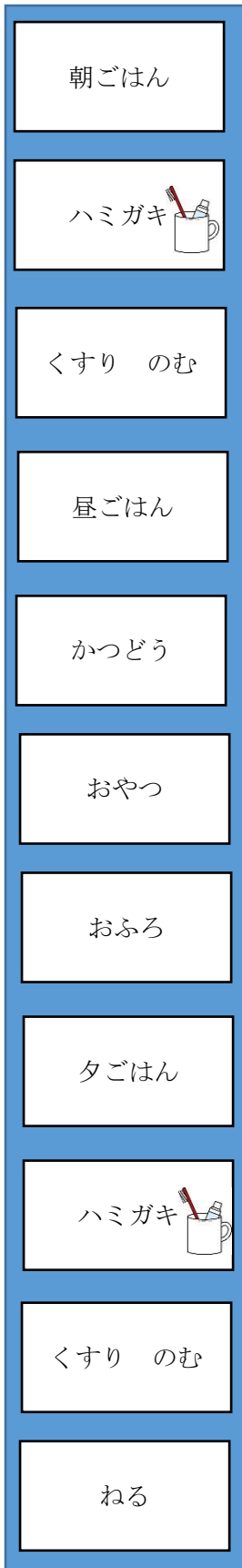
* 特性 *

- ・会話を楽しんでいるように見えて、コミュニケーションは一方通行。
- ・見えるものが気になり、見えるものに固執する。言い換えれば、見えなければ気にならない。
- ・長い期間、目的や目標に向かって意欲を維持することが難しい。
- ・必要な物が手に入ったら全てリセットされ、積み重ねによる学習が難しい。
- ・枠組みがないと何を選択して良いか、悪いかの判断ができず、要求がどんどんエスカレートしていきやすい。
- ・精神年齢のレベルからもまだ職員との一対一の関係の段階。



3. コンサルテーションによる助言内容

★言葉掛けから視覚支援へ



- ・職員が次の行動を示す言葉掛けに合わせて、該当するカードを本人に渡す。
- ・行動が終わったら、終了ボックス（フィニッシュボックス）に職員と本人と一緒にカードを入れる。
- ・カードで次の行動が分かってきたら、カードを渡す時の言葉掛けを減らしていき、最終的にはカードを手渡すだけで次の行動を示す。行動が終わったら、本人一人で終了ボックス（フィニッシュボックス）にカードを入れる。
- ・最終段階は職員がカードを渡すのではなく、掲示されたスケジュールから自身でカードを取って行動ができ、職員の指示に頼らなくても自立して行動できるようになることを目指していく。

★ひとつの場所の多目的利用から構造化へ

- ・居室は寝たり、余暇を過ごす場所と分け、作業は作業室で行うように、場所ごとに何をやる所かを明確にする。
- ・まずは職員と一緒に散歩しながら作業室の場所を外から確認する。次は職員と一緒に作業室内を見学、職員と一緒に個別の自立課題に取り組む、と段階を踏んでステップアップ。周囲の様子が刺激になるようであれば、パーティションで区切るなどの見えない工夫も検討してみる。

★時間や言葉掛けの作業からワークシステムへ



POINT

ワークシステムは、何をどのくらい、どの順番でやったら良いか、どこまでやったら終わりかを具体的に示すものです。

- ・自立課題の作業は、どこまでやったら終わりかを明確化するように示す。10個や15個など、本人が集中してできそうな個数を提示し、その間は職員との会話をしないで集中することをルールとして取り組む。
- ・決められた個数の作業が終了したら、〇分休憩し、休憩後に再び決められた個数の作業に取り組む。何回繰り返すかは、これまでの経過から検討していく。

★言葉掛けから視覚的な選択肢提示へ

- ・ゲームの購入などで行うように、作業なども視覚的に選択肢を提示する。
- ・ごほうびも、枠組みはこちらで決め、その選択肢の中から本人が選ぶ。

★〇日後の概念を視覚化へ

- ・日めくりカレンダーを用意したり、1か月単位のスケジュール表を用意したり、本人が見通しをもてる方法を探してみる。

4. コンサルテーション実施後の施設での取り組み

①スケジュールの導入。左上から下に順番にこなし、左下まで終わったら右へ。一つ一つの予定が終わったらフィニッシュボックスに入れる。



(↑フィニッシュボックスの袋)

②1か月の予定表の作成。1日のスケジュールが終わったら、スタンプを押す。メリハリを付けるため、外出予定などの楽しみの日は大きく表示している。



③居室から作業棟での作業に変更。

5. 本人の変化と現況について

- ・上記①、②、③の取り組みについて、本人の受入れは良好であった。
- ・1日のスケジュールを示し、一つ一つの活動が終わったらフィニッシュボックスに入れることで活動の終わりが目に見えて理解しやすいため、服薬を食堂で行えるようになったり、昼食時にはマンツーマン対応が外せたり、最後のカードをフィニッシュボックスに入れると一日の終わりとして理解して19時半にはマンツーマン対応が解除でき、職員が他の利用者への夜間対応に移れるようになった。
- ・職員と一緒にではあるが、作業棟に移動して午後に1時間の作業ができるようになってきた。作業は量よりも時間で区切った方が分かりやすかったため、15分作業したら5分休憩とし、作業中に本人が話し掛けても職員は応答しないことを徹底してメリハリを付けて対応中。
- ・施設長からは、助言を基に仕組み、本人に変化が見られることで職員も見通しを持って支援ができるようになったとの話があった。

6. フォローアップのための訪問時に挙げた相談事項と助言内容について

- ・今後の課題として、午前中にも作業棟で作業ができるようにならないか、本人に提案してステップアップしていきたいとのことであった。作業内容は午後と同じでも良いかとの相談があったため、午前と午後のメリハリを付けるために作業内容は変更した方が良いのではないかと助言を行った。また、持続が難しいタイプであるため、短いスパンで強化子を提供するなどの工夫も必要であることを確認した。

